

第十五部会

沖縄県宮古島北部の祭祀儀礼について

川田 桂

沖縄県宮古島北部に位置する狩俣、島尻、大神島の三部落では、ウヤガン祭とよばれる、その地域に住む女性達のみによって集団的に行われる村落祭祀が行われている。そこでは、神役の女性に神が憑依するとされており、いわば憑依型ともいうべき祭祀形態が伝えられている。

ウヤガン祭の儀礼の中心を構成する御嶽での行事内容は、島外の人々にはもちろん、村の人々にも秘され、家族にも話してはならないとされており、その禁忌は今でも厳格に守られ続けている。したがってその具体的内容はあまり知られていない。

このような憑依型の祭祀形態を伴う女性村落祭祀であるウヤガン祭は、島尻部落では一九九七年まで、狩俣部落では二〇〇三年まで行われていたが現在は中断されており、現在なお続けられているのは大神島のみである。

日本本土では、女性による村落祭祀そのものが、ほとんど存在せず、また、沖縄でも女性村落祭祀は見られても、憑依形態のそれは宮古島北部の三地域以外ではすでに早くからみることができない状態であった。

また、この狩俣、島尻、大神島の三地域では口頭伝承のみに

よる「神歌」が一種の神話的伝承として古くから受け継がれている。このような神歌の伝承も日本本土ではまったく消失し、沖縄地域でも見られるところは多くない。

これまで、当該地域に関して、狩俣や島尻のウヤガン祭については複数の調査報告があり、また、狩俣の神歌については、主要なものは採集されている。しかし、それらの祭祀儀礼や神歌のベースとなっている、いわゆるウヤガン信仰とそれを支える村落生活の全体像を明らかにし、分析・検討を加えた研究は、これまでのところあまりみられない。

本発表では、宮古島北部のウヤガン信仰について、狩俣、大神島のウヤガン祭の儀礼および神觀念について考察を行うものである。

宗教的職能者の選択

——現代沖縄の死者儀礼を事例として——

越智 郁 乃

これまでの民俗学、人類学的沖縄研究は、地理的空間を限定した地域に先祖代々住んでいる人々を対象にするという暗黙の前提があった。そのため、今日の都市部を形成している「移動者」のような存在は対象とされず、沖縄の文化や社会が抱える現在の状況が捉えにくいという指摘がなされてきた。また、民俗宗教においては、外来宗教に対する固有の信仰体系としての

第15部会

村落祭祀と家庭祭祀という二つのレベルから研究されてきた。しかし現実には、一つの儀礼にユタ的宗教者、陰陽道による占いや、仏教僧侶などが職能者として関わっているという状況がある。そのため、固有信仰対外来宗教というような区分けではなく、複合的で動態的な把握が必要なのである。以上を踏まえて、本研究でも職能者を区分けせず「宗教的職能者」として定義し、現代沖縄の死者儀礼に関する考察を試みる。

これまで復帰以降の火葬の普及や仏教僧侶、葬祭業者の利用は外来のものとして否定的に捉えられてきたが、これらの実践に着目した研究は、儀礼変容という観点から、沖縄の現在の状況を考慮に入れている点で非常に重要である。しかし、「外部化」「本土化」「沖縄化」という表現にみられるように、社会変化を一方に固定した分析枠組みでは、変容にいたる過程が捉えにくいといえるのではない。以上の問題意識から本研究では、死者を祀る側が、どのように宗教的職能者を選択しているかという観点から考察を行う。事例としては、墓の移動を巡る死者儀礼を取り上げた。その理由は二点ある。まず墓は死者儀礼の重要な場で、長期的な宗教的職能者との関わりを考察できる。また、都市に定着した移動者にとって、故郷にある墓に対する祭祀継続を巡って墓の移動が問題になることが多い。そのため、墓の移動に関する話し合いや儀礼を通じて墓は、祀る側や宗教的職能者の行動様式や思考様式が表出する場となるからである。

選択過程の分析と祀る側の語りを通じて本研究が提示するのは、死者儀礼は「く化」というように一方向への変容するもの

ではなく、「死者儀礼に関する知識がせめぎあう場」であるということである。例えば、ある士族層では儀礼のやり方に精通した上位世代がいるため、宗教的職能者は必要とされない。また、女子継承を禁忌と唱えるユタが否定され仏教僧侶が選択された事例では、拝所（王墓）でのユタを伴わない儀礼行為も見られた。そして、これらの事例で共通するのが「自分たちの死者儀礼のやり方」を強調する語りであった。ここでいう「やり方」とは、死者儀礼に関する知識の総体と捉えることができる。そこで、渡邊欣雄の論じる民俗知識論を用いて検討すると、死者儀礼における知識の成層性と可変性が明らかになる。

例えば、死者儀礼に関する知識は個々のうちに濃淡があり、一つの知識にも支持・不支持がある。しかし、広い範囲において適用できる知識であるということは、現在のところ他の知識を優越して支持される要因となりうる。その点で、仏教僧侶（または葬祭業者）は広い範囲で適用できる知識を持つため、優越しやすい。ゆえに、支持された知識が儀礼という場で表出する。しかし、広範囲適用可能な知識が常に優越するとは限らず、始原志向をもって琉球王朝と結びつくような知識が同時に支持される場合も認められた。このように、知識は固定化されず、互いにせめぎあい、交渉しあいながら死者儀礼の中で共存していると捉えるほうが妥当ではないか。そして、死者儀礼を一方方向への変容としてみるのではなく、固定されない知識を常になうまく選択しながら、あるいは使い分けながら、死者儀礼を継続させているという状況に注目することで、現代沖縄の死者儀礼研究への新たな理解が開けるのではないだろうか。